



Title	デンマ ーク語の長・短母音 : 母音音長は後続子音の数から予測できるか
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 1976, 3, p. 3-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95891
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の長・短母音

——母音音長は後続子音の数から予測できるか——

間 瀬 英 夫

1. 1. スウェーデン語やノルウェー語では、(強勢のある) 母音の「音量」は後続子音のそれと逆比例する、即ち、相補分布をなすと言われる。つまり、(音韻的に) 母音が“長い”とき子音は“短く”，母音が“短い”とき子音は“長い”。この場合，“長い”母音とは、解釈の仕方によって，“短”母音に対する“長”(long) 母音，あるいは“単(一)”短母音に対する同一短母音の連続からなる“重”(geminate) 母音のどちらかのことであり，“長”い子音とは同一短子音の連続である“重”(または“長”) 子音，及び，異なる2個(以上)の子音の連続の両者を含むものである(cf. §1.2.)。

このような母音・子音間の音量相関は上述2言語ではかなり一般性の高いもので，少くとも単形態形，相当数の屈折形，派生形にあてはまると言われる(例えば，cf. (参考文献) [12], [16], [17], [24])。このような相補分布が認められるとき，(強勢のある) 母音の音量は後続子音の音量というより「数」から予測できるであろう。即ち，後続子音がゼロまたは1個なら先行の母音は“長く”，子音が2個(以上)なら母音は“短い”という予測ができよう。それが可能であれば，母音の音量(=音長)を初めには(即ち，生成音韻論というレクシコンにおける基底表示では)決めておく必要はなく，その後の音韻プロセスのどこかで(実際にはなるべく早く，恐らく語法的余剰規則によって)母音量を指定すれば良いであろう。[(基底)母音の種類(=質，音色)は量の場合とは違って，特別の場合(例えば，ある子音(連続)の前には「偶々」ある母音しか現れないと言った場合)を除いて，一般的には後続子音の量からは予測できないであろう。同様に，母音の音量から後続子音の音量というより数は予測できて

も、その子音がどのような質のものか、また子音が2個以上の場合、それが同一子音の連続なのか、異なる子音の連続なのかは一般的には予測できないであろう。従って、音韻部門で興味があるのは後続子音の数から先行母音の音量を予測できるか否かということであろう。]

さて、上述の母音量指定規則は上記2言語では有効のようであるが、デンマーク語（以下、デ語と略す）ではどうであろうか。デ語でも、例えば、*rus* (I. P. A. 表記、以下同) [ʁu·ʔs] <陶醉> , *rus* [ʁus] <新人> とか *læse* [lé:sə] <読む (inf.)> , *læsse* [lésə] <荷を積む (inf.)> におけるように、語の意味を区別するために、発音の上で長・短母音状音は区別されなくてはならない。この長・短母音の発音形を得る(=‘派生’させる)ために、最終的発音形(=実現形)に至るまでのどこかで長・短母音を区別しなくては、あるいは区別しておかなくてはならないわけである。もしデ語でもスウェーデン語やノルウェー語におけるようにほぼ自動的に音長を指定できるなら、レクシコンにおける基底表示では母音量は指定せず、その後の音韻プロセスのどこかで指定すれば良いわけである。これはデ語の場合可能であろうか。以下、デ語の場合のみを検討するが、その前に、デ語の母音、子音の「長・短」について少し述べることにする。

1. 2. デ語において「長・短」母音は実現形に至るまでのどこかで音韻的に区別されていなくてはならないはずである。⁽¹⁾ この「長・短」の相異を“重・単”のそれとするか“長・短”のそれとするかではどちらが（音韻部門で）適切であろうか。まず、「長」母音とは2個の同一の“短”母音が同一音節中で相前後して並ぶ“重”母音で、単一の“短”母音からなる“単”母音に対するもの（例えば /ii:/i/）であると考えてみる。このようにすると、後述の子音の場合と平行に“重音(化)”を母音にも認め得ることになり、更に、後述の音韻的 *stød* 生起条件 (cf. §2.1.) とか形態音韻的長・短音素化 (cf. §2.3.4.) などを考慮すると、“重・単”母音と考えるのが優利となろう。また、“重・単”母音の区別が音韻的な区別だとすると、「音長」を区別する素性（例えば [long] とか [tense] と

か)を、少なくとも母音に関しては、音韻プロセスの途中で /ii/ → [i:] に変えようとする時点までは認めなくても済むが、果してそれが適当か否かはわからない。(ついでながら、デ語では母音にも子音にも音声的には [tense] という素性は適しない (cf. 拙論[25], [27])。しかし、もし“重”母音を認めるなら、子音音素の設定の仕方にも関連することだが、以下のことが明示されなくてはならない。2つの“短”(または“単”)母音から成る“重”母音は全体で“音節的”となる。そして、その中の第1母音が音節的(=主音)、第2母音が非音節的(=副音)となる。更に、“重”母音は(何らかの理由で短音化が起らない限り)、例えば /ii/ → [i:], /uu/ → [u:] のように、二重母音化されることのない長母音状音で実現されるように導かれなくてはならない。換言すれば、次のような実現形を導かないようにしなくてはならない: /ii/ → [ij] (= [ij]), [ji] (= [ji]), /uu/ → [uɪ] (= [uw]), [ɪu] (= [wu]), [uv], [vu] といった「上り・下り二重母音」とか「母音+子音」とか「子音+母音」と言った実現形を派生させないようにしなくてはならない。⁽²⁾ ([wu] は(そして [ij] も?) デ語には起らないので、一般余剰規則でその旨を明記すれば良いであろう。)その点では、「長・短」母音が、例えば /i:/ 対 /i/ のように、“長・短”という“音長”によって区別されとした場合、上述の第1, 第2母音の音節性云々は問題とならない。また、音素配列論の点で、例えば /āv/ ([æ:v] (更に [æ:u] → [æu] になることもある)) と /av/ ([aʊ]) の /v/ はどちらの場合にも「母音直後」に現れる子音とすることができる。一方、母音が“重・単”による区別だとすると、例えば /aav/ の「非音節的」である第2母音 /a/ は /av/ とか /as/ における「非音節的」である /v/ とか /s/ と音節中で同じ位置に来ることになってしまい、その結果、いくつかの音韻規則の適用を不可能にしたり、規則の記述を不必要に複雑にしたりすることになる。

以上のようなわけで、“重・単”と“長・短”とではどちらが優れているか決めたいが、以下、本論では“長・短”、即ち、“音長”によって

「長・短」母音は区別されるとして、論を進める。その理由は、“長・短”母音の各々が全体として「音節的」であること、そして実際のデ語（発音）習得という実用的見地も考慮して音素表記と音声表記をできるだけ一致させることにある（それ故、/i/ のようではなく /i:/ のような表記を用いる）。しかし、“音長”による区別を行う以前に、例えば /ii/ → /i:/ といった“重”母音を“長”母音に変えるプロセスがあることを必ずしも否定するわけではない。

一方、子音は同一子音が連続する場合は、例えば /ss/ のような“重”子音と考え、/s:/ のような“長”子音とは考えないことにする。その理由は §1.1. から理解されようし、以下の議論でも示すが、少なくとも母音音長（及び ‘stød’）予測可能性に関しては「音長」（「音量」）より「数」の方が重要と考えるからである。尚、以下で“複”子音と呼ぶものは、1 個の子音、即ち、“単”子音に対するもので、同一の子音の連続及び異なる子音の連続の両者のこととする。同一子音の連続は最低及び最高 2 個の連続、異なる子音の連続は最低 2 個の連続とする。[デ語では音素的に重子音を設定したとしても、その実現形としての重子音（例えば [ss] または [s:]）は現代語には存在しない。それ故、3 個（以上）の同一子音からなる(3)重子音を設定しても音韻規則に関して意味をもたない。因みに、スウェーデン語とかノルウェー語では基底重子音は表層でも（＝発音形としても）重子音で実現される。]

2. 1. 後続子音の数から先行母音の音量を予測する規則は、§1.1. で述べたように、スウェーデン語やノルウェー語では有効のようであるが、デ語の場合には事はそう簡単にはいかない。デ語には上記 2 言語にはない“stød”という特殊な音韻現象があり、母音音長、特に単音節中のその予測可能性はこの“stød”と関連させて考えなくてはならない。そこでまず、この“stød”について述べることにする。

“stød”は喉頭せばめ音 [ʔ] で実現されるもので、音節を単位として音節中の母音か子音に起る。それ故、stød（以下、S と略す）は通常の‘分

節’ 音素というよりは、強勢などと同様に韻律的単位の一つと考えられている。Sは起るとすれば次のような音の上または後に実現される⁽³⁾：(1)長母音状音；(2)短母音状音直後の音節末有聲子音状音（[m, n, ɒ, l, ʋ, ð, r, ʉ, i]）。従って、次のような音にはSは起らない：音節頭子音（状音）；短母音状音；及び音節末無聲子音状音（=[p, t, k, b, d, g, f, s, ʃ, ʒ]）。⁽⁴⁾ 上述の(1), (2)の音は‘音声的S基’をもつ音で、必ず‘音韻的S基’をもつ音素から派生する。‘音韻的S基’をもつ音素とは“長”母音及び（短母音直後の音節末）“有聲”子音（=/m, n, l, r, b, d, g, ʋ, j/）である。音声的S基をもつ音は‘音声的S（生起）条件’は満すが、‘音韻的S条件’は必ずしも満さない。“長”母音は必ずこの後者の条件を満すが、当該有聲子音の方は、形態素境界をはさまずに1個（以上）の子音（Hjelmslev ([18]) の言う‘潜在’子音も含む）に後続されたとき初めてこの条件を満す。⁽⁶⁾ 例を示そう。

いわゆる“保守的”標準語（後述）の場合、“有聲”故に音韻的S基をもつ/d/, /g/は音節頭では各々[d], [g]であるが、音節末では各々[ð], [r]で実現される場合と、この[ð, r]が或る音韻規則に従って更に[ð]→[d]→ゼロ, [r]→[g]のように変化して実現される場合がある。従って、音節頭[d, g]は別として、音節末[ð, r]は“有聲”なので音声的S基をもつが、[d, g]（=[ð, r]が[d, g]に変化した時点のもの）はそれをもたない。（/t, k/は“無聲”なので、その実現形[t, k]（音節頭）及び[d, g]（音節末）をみるまでもなく、音韻的S基をもたない。従って、これらの音素から音声的S基をもつ音が派生することはない。）次に、/r/は“有聲”なので音韻的S基をもつ。この/r/は音節末では通常“有聲”の[ʋ]で、この場合には音声的S基をもつが、短母音と“無聲”子音/p, t, k, f, s/のいずれかの間に現れるときは“無聲”の[ɸ]となり、音声的S基をもたない（あるいは、失う）ことになる。従って、[ɸ]が現れるとき、“/r/+子音”は子音のS実現規則に関して例外となる。（他の有聲子音は閉音以外、同上条件で無声化されて実現することはない。）

以上のようなわけで、後述する他の条件は別としても、ある音の上または後に S が実現されるためには、まず第一にある音素が音韻的 S 基を持ち、音韻的 S 条件を満たさなくてはならず、そしてその後の時点で音声的に有声か否かのチェックを受け（母音は常に有声）、有声ということが確認されて初めて音声的 S 基をもつことになり、やっとその音に S が実現され得ることになる。このようにして、S に関する上述の（仮）説が正しいなら、「母音音長は S をそう入する以前に指定されていなくてはならない」はずである。

（尚、Basbøll（及び他の人々）は明示していないが、長母音音素が音韻プロセスの比較的遅い時点で短音化され、短母音状音で実現されるとき、それは音声的 S 基を失う（cf. §2.3.2.）。この事実は種々の時点で起る母音の長・短音化（規則）に関して重要なことと思うが、これについては別の機会に詳しく述べるつもりである。ところで、§1.2. で述べたように、“長”母音ではなく“重”母音を認め、その第 1 母音が音節的、第 2 母音が非音節とするなら、「音韻的 S 基をもつ音素とは音節的母音直後の“非音節的”で“有声”の音素である」と言えようが、前述のように、S 規則以外の音韻規則に関し、子音と（第 2）母音が同じ機能をもつとするのは適当とは言えないであろう。）

S 生起に関して、この他にも種々の条件がある。S は音節を単位として起ると述べたが、1 語中の各音節に起るというわけではない。S は音韻的・音声的弱音節には起らない。従って、S は強勢の有無を前提とし、通常 1 語につき 1 回しか起らない。そして、S は特に単音節形に現れるもので、（強強勢をもつ）単音節形では音韻的及び音声的 S 条件を満たせば（特別の例外を除き）必ず S は起るが、2 音節形（以上）の形ではたとえ同上条件を満たしても、屈折、派生、合成等々の何らかの形態的条件が伴わない限り S は起らない（というより、同上 S 条件を満たし、何らかの形態的条件を伴えば S は起る、と言った方が適切かもしれないが）。S は単音節形の特徴であると言っても、弱強勢音節には起らないのであるから、語一的強強勢

をとり得る名詞，動詞，形容詞，副詞などのいわゆる‘実質語’ (full words; class words) である語類に主として起る。

ところで，文中では，丁度強勢が統辞的要因に支配されて弱化するように，Sも弱化，即ち，“脱落”することがある。本論でとり上げるSは文中での弱化規則を適用する以前のもの，つまり，語一的強勢に対応の語一的Sである。

Sをもたない方言もある (cf. 例えば Ringgaard [20] p.21f.)。そして上述の諸S生起条件を満たさなければ，Sは起らないし，コミュニケーションのために絶対必要というわけでもない。だからと言って，Sが重要でないと考えるのは大きな誤りである。Sの存在は種々多数の音韻規則に関係する。それ故，たとえ最終的に表層では実現されないことがあっても，ある一定の正しい実現形を導くために大きな役割を果たしている。⁶⁰

2. 2. さて，本題に戻り，後続子音の数から先行母音の音長を予測する可能性を検討することにする。以下，例をできるだけ名詞の単音節形に限定し，それも少くとも現代語では単形態と直感される（であろう）ものを選ぶことにする。（他の品詞を例に用いるときはその品詞名を示す。）これらの単形態単音節形は辞書の見出し語となる原形，即ち，屈折，派生等のプロセスを経ていないもので，名詞の場合いわゆる‘未知形’と同じと考えて良い。このような単形態単音節形を選ぶ理由は，屈折，派生等のプロセスを経る以前の形，つまり基底形そのものまたは基底形にもっとも近いものを選ぶためであり，同時に，この形は §2.1. に示したS条件を満たせば（語一的）Sをとるはずだからである。発音はいわゆる‘保守的’標準口語のものとする。⁶¹

ここでもう一度明確にしておくが，基底での母音音長は今のところ指定されていない。そこで，後続子音の数から母音音長を予測する，つまり，なるべく早い中に，恐らく‘語一的余剰規則’（の一つ）によって音長指定

という作業を行おうというわけである。(尚、母音に先行の子音は、例えば *hus* [hu•ʔs], *mus* [mu•ʔs], *rus* [ɽu•ʔs], *krus* [kɽu•ʔs] とか *lā* (vb.) [lɔ•ʔ], *sā* (vb.) [sɔ•ʔ], *rā* (adj.) [ɽɔ•ʔ], *gā* (vb.) [gɔ•ʔ], *slā* (vb.) [slɔ•ʔ], *grā* (adj.) [gɽɔ•ʔ], *skrā* (adj.) [sgɽɔ•ʔ] などにおけるように、その数及び質の相異は後続母音の音長指定には関係しないので、以下、これについては一切述べない。)

例: (i) : (1) *ko* [ko•ʔ], (2) *lim* [li•ʔm], (3) *ran* [ɽa•ʔn],
(4) *dal* [dæ•ʔl], (5) *tab* [tæ•ʔb], (6) *nɔd* [nɔ•ʔɔ]
<苦恼>, (7) *sag* [sæ•ʔɽ], (8) *væg* [vɛ•ʔg],
(9) *rus* [ɽu•ʔs];

(ii) : (10) *amt* [amʔd], (11) *mɔnt* [mɔnʔd], (12) *sang*
[saŋʔ], (13) *bank* [baŋʔg], (14) *hals* [halʔs], (15)
elv [ɛlʔv], (16) *sagn* [saɽʔn], (17) *hast* [hasd],
(18) *laks* [laɡs], (19) *kraft* [kɽafɔd].

問題の母音は「後続子音がゼロまたは1個のとき長く、同子音が2個(以上)なら短い」という(余剰)規則が有効であるようにするためには、例(1)~(19)のような場合、以下のような(基底)音素から構成されているとすれば良いであろう(NB.以下に示す音素は仮の分類に基くものにすぎない):

(i) : (1) /ko/, (2) /lim/, (3) /ran/, (4) /dal/, (5) /tab/,
(6) /nɔd/, (7) /sag/, (8) /vɛk/, (9) /rus/;

(ii) : (10) /amt/, (11) /mɔnt/, (12) /sang/,
(13) /bank/, (14) /hals/, (15) /elv/, (16) /sagn/,
(17) /hast/, (18) /laks/, (19) /kraft/.

上述の母音音長指定規則に従って、(i)のタイプでは母音は長いことになる:

(1) /ko/ → /ko:/,.... (6) /nød/ → /nø:d/, (7) /sag/ → /sa:g/, (8) /vek/ → /vɛ:k/, (9) /rus/ → /ru:s/. 次に、長母音は音韻的 S 基をもち、音韻的 S 条件を満たすので（余剰規則によって）S をそう入する：(1) /ko:/ → /ko:ʔ/,.... (6) /nø:d/ → /nø:ʔd/, etc. そして実現形（＝発音形）の母音も長いのでそこに S が起っている。一方、(ii) のタイプでは、末尾子音が複数なので母音は短い：(10) /amt/ → /ämt/,.... (12) /sang/ → /säng/, (13) /bank/ → /bänk/,.... (15) /elv/ → /ëlʋ/,.... (17) /hast/ → /häst/, etc. 次に、(10)～(16) では、（短母音直後の音節末）子音は“有声”なので音韻的 S 基をもち、そして別の子音に後続されることによって音韻的 S 条件を満たすので、S がそう入されることになる。一方(17)～(19) の第 1 子音は“無声”なので後続（第 2）子音の有無に関係なく、S はそう入されない：(10) /ämt/ → /ämʔt/,.... (12) /säng/ → /sänʔg/, (13) /bänk/ → /bänʔk/,.... (16) /sägn/ → /sägʔn/,.... (17) /häst/ → /häst/, etc. そして、(10)～(16) の（第 1）子音は表層でも有声なので、そこに S が起っている。[(12), (13) では、(a) 鼻子音調音点同化, (b) 歯（茎）音またはゼロの前以外の環境で /a/ → [a]; 更に (12) の場合、(b) 以前か以後に [r] を削除する; (16) の /g/ は [g] ではなく有声の [r] なのでそこに S が起る。]

次に、(ii) とは異り、第 2 子音が表層では実現されない‘潜在’子音である場合をみてみよう：

例：(iii) (20) *mand* [manʔ], (21) *held* [hɛlʔ], (22) *selv*
 (pron.) [sɛlʔ] (cp. (15) *elv* [ɛlʋ]), (23) *halv*
 [halʔ] (稀に [halʋ]).

例(20)―(23)の短母音状音は短母音の実現形と考えられる。[(20), (23) の [a] は *kant* [kanʔd], (14) *hals* [halʔs] と同じ質の母音。長母音 /a:/ は /r/ の前または後以外の環境では [æ:] (cp. (4) *dal* [dæ•ʔl]) で、たとえ短母音状音化されても [æ] であって、[a] とはならない。] これら

の場合、末尾子音字（書記素）*d* 及び *v* の部分を Hjelmslev ([18]) によって広く知られているように ‘潜在’ 子音、即ち、基底子音 /d/ 及び /v/ として認めれば、複数子音の前に現れる母音は短いという規則に適合することになる。この /d/, /v/ は(20)～(23)のような名詞形では表層の発音形としては現れないが、(20), (21) から派生の形容詞 (20') *mandig* [mándi], (21') *heldig* [héldi], (22) から派生の代名詞 (22') *selve* [sélvə], (23)から派生の動詞 (23') *halvere* [halvé•ʔvə] では“顕在”の [d], [v] となる。（この他、/rd/ 結合における潜在/d/ があるが、これについては後述する。）さて、Hjelmslev が(20)～(23)のタイプの語に潜在子音を認める最大の論拠は、それが派生形において音声的に実現されるということにあるのではなく、第1子音に現れるSを説明することにあると思われる。即ち、音韻的S基をもつ /n/, /l/ は ‘潜在’ 子音に後続されることによって音韻的S条件を満足させ、表層でも有声の [n], [l] であるので、そこにSが実現される。このようなわけで、(20)～(23)に ‘潜在’ 子音を設定することになると、それらは次のようなプロセスを経て実現形に至ることになろう：(20) /mand/ → (音長指定) /mänd/ → (Sそう入) /mǎnʔd/.... → [manʔ], (22) /selv/ → /sělv/ → /sělvʔv/.... → [selʔ].

上述の(20)～(23)のような場合、派生形では /d/, /v/ が発音形として実現されるわけであるが、次に、派生形の有無には関係なく、表層には決して現れない基底子音をもつと思われる場合をみてみよう：

例：(iv) (24) *ham* [hamʔ] <蛇のぬけがら>, (cp. (10) *amt* [amʔd]),

(25) *løn* [lønʔ] (cp. (11) *mønt* [mønʔd]),

(26) *hal* [halʔ] (cp. (14) *hals* [halʔs],

(23) *halv* [halʔ]),

(27) *nød* [nøðʔ] <木の実> (cp. (6) *nød* [nø•ʔð])

〈苦惱〉),

(28) (a) *lap*, (b) *lab* [lab] (cp. (5) *tab* [tæ•?b]),

(29) *væk* (adv.) [væg] (cp. (8) *væg* [væ•?g]),

(30) *rus* [ɹus] 〈新人〉 (cp. (9) *rus* [ɹu•?s])

〈陶醉〉).

これら(iv)のタイプではいずれも“単一の”子音状音の前に短母音状音が現れている。[(iii)で説明したように, (iv)の例中の[a, ɑ]は短母音 /a/の実現形である。]そこで, 末尾子音を基底では“重”子音であるとする, 先行母音の音長指定ばかりでなく, S そう入もできることになる。即ち, 母音は複子音 (= “重”子音) の前では短い: (24) /hamm/ → /hām/,... (27) /nødd/ → /nødd/ (cp. (6) /nød/.... → [nø•?ð]),.... (29) /vækk/ → /vækk/ (cp. (8) /væk/.... → [væ•?g]), (30) /russ/ → /rüss/ (cp. (9) /rus/.... → [ɹu•?s]).

次に, 音韻的S そう入となるが, (28)~(30)の子音は無声なのでS基をもたない。これに対し, (24)~(27)の子音は有声なのでそれをもち, その上, 別の子音(即ち, 重子音中の第2子音)に後続されるので, 音韻的S条件を満足させ, Sをとる: (24) /hām/ → /hām?m/,... (27) /nødd/ → /nødd?d/,... しかし, (29) /vækk/ → /vækk/, (30) /rüss/ → /rüss/. その後, 実現形に至るまでのどこかで“重”子音を“単”子音に変える(cf. §1.2.の終り): つまり, (24) /hām?m/ (....) → /hām?/.... → [ham?] または /hām?m/.... → [ham?m] (....) → [ham?] とか (30) /rüss/ (....) → /rüs/.... → [ɹus] または /rüss/.... → [ɹuss] (....) → [ɹus] のようにする。そして(24)~(27)の子音は有声で実現されているのでそこにSが起っている。⁽⁸⁾

このようにして, (iv)のようなタイプの形に基底重子音を認めると, 先行母音の音長指定もS そう入も(i)~(iii)の場合と同じ規則によってできることになる。又, このような重子音を認めると次のようなことが説明で

きる。Basbøll によれば ([2] I. 189ff., [8] 206f.; cf. Hjelmslev [18] 23, Rischel [22] 129), 「鼻子音の前では前舌円唇短母音音素は 1 個しかない」という一般余剰規則が設けられる。即ち, 他の環境では /y/ (=前舌円唇狭 (= [+high]) 母音) と /ø/ (= [-high]) の対立があるが, 鼻子音の前では舌の高さ (= [high]) が無指定のただ 1 個の前舌円唇母音しか現れない (仮にこれを /y/ で示す)。その‘異音’分布は次のようになる: 鼻子音 + 口腔子音の前では [ø], 鼻子音 (+ 鼻子音) の前では [œ]: 例: *synd* [sø̃nʔ] (/synd/), (11) *mø̃nt* [mø̃nʔd] (/mYnt/), (25) *lø̃n* [lœ̃nʔ] (/lynn/). (Basbøll は *hø̃ns* [hœ̃nʔs] のような場合には一度も言及していないが, これは /hYnns/ のような構造をもつことになる。)

さて, /r/ + 子音の場合をみてみよう:

例: (v) (31) *barn* [bær̥ʔn],
(32) *bark* [bær̥g].

(31)も(32)も母音は複子音の前に現れているので短いと言えよう。音韻的 S 基に関しては, /r/ は音韻的 S 基をもち, 子音に後続されるので音韻的 S 条件を満足させる: (31) /bær̥n/ → /bær̥ʔn/, (32) /bær̥k/ → /bær̥ʔk/. ((32)の場合, S をそう入しなくとも考えられるが, RM 3 の付加的規則を有効にするためにも, ここで S をそう入しておいた方が良い (cf. 拙論 [26])). (31)の /r/ は表層でも有聲の [r̥] で音聲的 S 基をもつので, そこに S が起る。一方, (32)の /r/ は無声の [r̥] なので音聲的 S 基をもたず, 従って, S は起らない。(32)のような無声子音に後続される /r/ は, (子音の) S 生起規則に対する唯一の体系的例外と言えよう。

2. 3. §2.2.に示したタイプの音韻構造をもつ語に関する限り, 母音音長及び *stød* 生起は予測可能と言えるが, 実のところ, これらの予測規則に適合しない事例が数種ある。

2.3.1. 末尾子音が複数であるにもかかわらず、単形態形で長母音が現れることがある：

- 例： (33) *bæst* [bæ•ʔsd], (34) *host* [ho•ʔsd],
(35) *pust* [pu•ʔsd/pusd].

これらの例に現れている長母音状音が短母音音素の長母音状音化によって実現されたものであるという音韻的理由は何もない。しかし、単形態単音節形で /st/ という複子音の前に長母音が現れることは稀とは言える。(/s/ と /t/ の間に形態素境界のある単音節形では長母音が現れることは多々ある。又、単形態2音節形では *kiste* [ki:sdə/kisdə]; “不定詞”=“語幹+e [ə]”=2形態とした場合には, *hoste*, *puste*, *faste* などでは /st/ の前に長母音が現れる。) *Bæst* <獣> はラテン語→古仏語→低独語を経てデ語に入った語だそうだが、少くとも音韻的にはデ語に帰化していると言える。*Host* <せき(払い)>, *pust* <プッと吹くこと> は元来擬音語のようであるが、擬音語及び間投詞はどういうわけかSをとらないということの特徴とするので、その点では上例は擬音語らしくない (cf. Hansen [15] 30; (間投詞: *ā(h)* [ɔ:], *nā* [nɔ:], *næ(h)* [nɛ:] (cp. *ā* (sb.) [ɔ•ʔ], *nā* (vb.) [nɔ•ʔ], *næ* (sb.) [nɛ•ʔ]), *bang* <バタン> [baŋ] (cp. *Bang* (人名) [baŋʔ])). それにしても、大多数の単形態単音節形では/st/ の前の母音は短い (*hest* [hesd], *last* [lasd], *øst* [øsd], etc.)。それ故、(33)~(35)のタイプを“例外”として扱うことは不適当なことではなかろうが、次に述べようと思う /r/ + 子音の場合と同様に /st/ の /t/ が [+dental] 子音であることは偶然ではないかもしれない。

2.3.2. 次に、/rd, rt, rs/の前の母音であるが、この場合長母音のみまたは長・短両母音が現れる。これは /st/ の場合とは異り、体系的であると思われる。(/r/ + その他の子音の前には短母音(音素)のみ現れる: cf. Basbøll [3] 73ff.)

- 例： (36) *jord* [jo•ʔʁ],
(37) *bord* [bo•ʔʁ],

- (38) *bort* <縁, 辺> (A) [bo•ʔɐd], または
 (B) [boʔɐd],
 (39) *børs* (A) [bø•ʔɐs] または (B) [bøʔɐs],
 (40) *bort* (adv.) [boʔɐd],
 (41) *børst* [bœʔɐsd] (稀に [bøʔɐsd]).

(36) *jord* は末尾に /d/ があると思われる (cp. 派生形容詞 *jordisk* [jœɾdi sg]; cp. (20) *mand*, (21) *held*)。 (37) *bord* は(36)におけるような派生形をもたないが、次のような理由で /d/ をもつと考えることはできる。(36), (37)などの [o•ʔ] は /o:/ から派生する。何故なら, /o/ は /r/ の前には現れない, というより, /o/ と /ɔ/ は融合し [ɔ] となるはずであるから。同様に, *færd* [fæ•ʔɐ] (cp. 派生動詞 *færdes* [fæɾdɐs]; [ä] は [æ] と [a] の間), *værd* (adj.) [væ•ʔɐ] (cp. 派生形容詞 *værdig* [væɾdi]) でも /r/ の前に現れる [ɛ•ʔ] は長母音 /ɛ:/ の実現形であって, 短母音/ɛ/ の同環境での [ä] が長母音状音化された結果 (即ち, [ä:]) ではない。⁹⁾ このようにしてみると, 実は, 単音節形末尾の /rd/ の前には長母音しか現れないことがわかる。従って, この環境での母音は長母音であること (及び /rd/ の /d/ は潜在子音であること (cf. §2.2. (iii) のタイプ)) は一般余剰規則で説明できるが, この場合の長母音は /st/ の前のそれと同様な “例外” であろうか。

次に, /rt/, /rs/ を含む例(38)~(41)をみてみよう。(38), (39) の(A)形, 即ち, 長母音状音をもつ形はその質からみて短母音から派生したものとと思われる (cp. 後続 /r/ の影響を受けた (40), (41) の母音)。(B)形, 即ち, 短母音状音が現れている方も長母音から派生したものであることはその母音の質からわかるが, もう一つ重要な事実がある。§§2.1. 及び 2.2.(v)で述べたように, 音節末 /r/ は短母音と /p, t, k, f, s/ のいずれかとの間に現れるとき無声の [ɾ] で実現される。(40), (41)ではこの [ɾ] が現れており, これは先行の短母音状音が短母音から派生したものであることを示す。一方, (38), (39)の (B) 形では有聲の [ɐ] が現れている。

この事実、(B)形の短母音状音が長母音の短母音状音化によって起ったものであり、その結果、(短母音状音にはSは起らないはずであるから (cf. §2.1.)) Sが“有声”の[ɤ]に移行されたということに他ならない。⁽¹⁰⁾ 以上のようなわけで、(38)～(41)はいずれも複子音の前に現れるが、(38)、(39)には長母音を、(40)、(41)には短母音を初めから、即ち、基底で認めざるを得ないと思われる。換言すれば、母音が少くとも“/r/ + 歯 (茎) の閉さ音またはまさつ音”から成る複子音に先行するとき、その母音の音長は後続子音の数からは予測できないことになろう。

同様の理由で、以下の単形態単音節形も基底長母音をもつと思われる：
nord [no•ʔɤ] (←/no:rd/), *fært* [fɛ•ʔɤd] (←/fɛ:rt/), *ært* [ɛɤʔd]
 (唯一形) (←/ɛ:rt/), *lort* [lo•ʔɤd/loɤʔd] (←/lo:rt/), *port* [po•ʔɤd/
 poɤʔd], *urt* [uɤʔd/u•ʔɤd], *kurs* [ku•ʔɤs/kuɤʔs], *fars* [faɤʔs/fa•ʔɤs].

2.3.3. さて、後続子音の数から先行母音の音長を予測する可能性を否定する決定的要因は次のことと思われる。(短母音から派生の) 短母音状音直後に現れる子音状音で、音声的S基をもつにもかかわらず、Sをとらないものがある。そのような“有声”子音状音の基底形として、先行母音の音長を予測さすべく、§2.2. (iv) の場合のような“重”子音を設定することはできない。なぜなら、そのようにすると、“有声”子音+子音は音韻的S条件を満たすことになり、実現形の“有声”子音状音にSが起ることになってしまうからである(しかし、前述のように、両子音間に形態素境界があるときは音韻的S条件を満たさない: cp. *tals* [tals] (*tal* の所有格) 対 *hals* [halʔs] <のど>)。以下、論議は後回しにしてまず例のみ示すが、問題の有声子音状音にSが起るか否かは子音によってかなり違う。

(a) [m] に終る形では、実質語でSをとらないのは“*M*” [ɛm] <(アルファベットの) *M*> だけと思われる (cp. *em* [ɛmʔ] <蒸気>).⁽¹¹⁾

(b) [n] に終る形では、Sをとらないものは [m] の場合より多い:

tin [ten], *ven* [ven], *søn* [soen], etc.;

cp. (25) *løn* [lœnʔ], (11) *mønt* [mœnʔd],

høns [hœnʔs], *synd* [sœnʔ], *vind* [venʔ];

cp. *sen* (adj.) [se•ʔn], *læn* [le•ʔn], *lån* [lɔ•ʔn].

(c) [ŋ] に終る形はSをとる。これは [ŋ] が /ng/ から派生するからである (cf. 註(5))。

(d) [l] に終る形ではSをとらないものがある:⁽¹²⁾

spil [sbel], *vel* [vel], *føl* [fɔl], *møl* [mɔl],

øl [ɔl], *hul* [hɔl], *kul* [kɔl], *nul* [nɔl] ([ɔ]

は一部の個人では [o]), *tal* [tal], etc.;

cp. *bal* [balʔ], (26) *hal* [halʔ], *halm* [halʔm],

falk [falʔg], *fald* [falʔ], (23) *halv* [halʔ],

sult [sulʔd], *huld* [hulʔ], *sild* [silʔ];

cp. *gal* (adj.) [gæ•ʔl], *gul* (adj.) [gu•ʔl].

(e) [ð] に終る形では、(a)の [m] の場合とは逆に、Sをとらないのが普通である (cf. Hansen [15] 37):

(Sなしのみ): *bred* [bʁeð], *fred* [fʁeð], *sted* [sdεð], *bad* [bað],

had [hað], *mad* [mað], *gud* [guð], *lod* [lɔð], etc.;

(Sつき, Sなしの両形:稀): *od* [ɔðʔ/ɔð] (cp. *lod* [lɔð]);

(Sつき長母音, 短母音+Sなし子音の両形): *stød* [sdø•ʔð/sdøð],

hud [hu•ʔð/huð];

cp. (Sつきのみ: 稀): *nød* [nøðʔ] <木の実>;

cp. (Sつき長母音のみ): *bred* (adj.) [bʁe•ʔð], *nød* [nø•ʔð] <苦悩>.

(f) [ʉ] に終る形: Sをとらないものはそれほど多くはない:

drev [dʁäʉ], *lov* [lɔʉ], *rov* [ʁɔʉ], *tov* [tɔʉ], *hav* [hau], *lav*

[la_u], *rav* [ʁa_u]; *nav* [na_u/na_u?];

cp. *skov* [sgv_u?], *rø_v* [ʁœ_u?], *syv* [sy_u?], *havn* [ha_u?n],

hævn [hœ_u?n], *søvn* [sœ_u?n], *sovs* [sv_u?s], *tavl* [ta_u?l];

cp. *ræv* [ʁæ•?v/ʁä_u]; *sav* [sæ•?v/sa_u?], *siv* [si•?v/si_u?];

lav (adj.) [læ•?v].

(g) [i] に終る形: *tøj* [tɔi], *møj* [mɔi] を除き (そして弱強勢代名詞 *jeg*, *mig*, *dig*, *sig* [ja_i, ma_i, da_i, sa_i] を加えても), この他は S をもつ。

(h) [ʁ] に終る形は通常 S をとらない:⁽¹³⁾

bær [bä_ʁ], *kar* [ka_ʁ], *par* [pa_ʁ], *smør* [smœ_ʁ], etc.;

cp. ([ʁ] + 子音): *arm* [a_ʁ?m], *barn* [ba_ʁ?n], *jarl* [ja_ʁ?l],

arg [a_ʁ?ɾ], *marv* [ma_ʁ?v], *djærv* [dja_ʁ?v];

([ʁ] + 子音): *mark* [ma_ʁg], *marts* [ma_ʁ(d)s], *vært* [væ_ʁd], *skærf* [sgä_ʁf], *fork* [fɔ_ʁg], *kors* [kɔ_ʁs].

(長母音をもつ例については §2.3.2. 参照。)

さて、上述の S をとらない子音は, *gulv*, *sølv* (及び *guld*) と同様“例外”とみなし、母音音長予測のため、例えば, *søn* [sœn], *tal* [tal] は /sønn/, /tall/ のように基底では重子音をもつが S は実現されないというようにすれば良いであろうか。

前述の通り, [m] に終る語は殆んど全て S をとるので, S をとる場合の [m] には /mm/ を基底に認めるのは適当と思われる。このように S 生起予測のために設定される重子音は先行母音の音長予測にも役立つことは事実である。しかし, [ø] に終る形は, [m] とは逆に, S が起るのは稀である。この場合, 短母音を予測させるために /dd/ (→ [ø]) を立て, *nød* [nøð?] のように S が起るのが“例外”だと言うことになると, “例外”(つまり, ‘有標化’されるべきもの)のタイプが多くなり過ぎ, 一つの音

韻規則としての有効性が失われよう。例えば、

- (42) *hav* [hau],
- (43) *nav* [naʊ[?]] または [naʊ],
- (44) *sav* [saʊ[?]] または [sæ•ʔv],
- (45) *lav* (adj.) [læ•ʔv],
- (46) *lod* [lɔð],
- (47) *od* [ɔð[?]] または [ɔð],
- (48) *nød* [nøð[?]] <木の実> ,
- (49) *nød* [nø•ʔð] <苦悩> ,
- (50) *stød* [sdø•ʔð] または [sdøð]

のような場合、末尾子音の数は先行母音の音長指定には関与しないというなら (cf. /st/, /rd/, /rt, rs/ の場合), 即ち、母音音長は基底ですでに指定されているとするなら、末尾子音の数はS生起予測に有効に用いることができよう。つまり、上例における末尾有声子音状音の基底形として、Sが起る場合にのみ“重”子音という音素結合を認める (cf. §2.2.(iv))。一方、音韻的そして音声的S基はもっていても音韻的S条件を満さない末尾有声子音(状音)及び音韻的にも音声的にもS基をもたない末尾無声子音(状音)には重子音を設定しない (cf. 後述2.3.4.)。(尚、単形態単音節形では、単一の /p, t/ の前には恐らく短母音しか現れないと思われるが、/k, f, s/ の前には長母音も短母音も現れる、cf. §2.2.(i), (ii)。)このように考えるなら、例(42)~(50)のような形は次のような基底音韻表示をもつであろう: (42) /hav/, (43) /navv/ 及び /nav/ の両形, (44) /savv/ 及び /sa:v/, (45) /la:v/, (46) /lɔd/, (47) /ɔdd/ 及び /ɔd/, (48) /nødd/, (49) /nø:d/, (50) /sdø:d/ 及び /sdød/. 同様に, “L”, “M”, “N” 等は各々 /el/, /em/, /en/ のようになろう。このように基底形を設定すれば、S予測は完全に可能となろう。

このようなわけで、後続子音の数から先行母音の音長を予測することは、stødがある限り不可能という結論に達する。

2.3.4. 仮りに名詞の原形と単数‘未知形’は同形であるということにすると、今まで例示してきた単音節名詞は単数未知形である。単数‘既知形’は未知形に前接的語尾 $-(e)n$ (共性), $-(e)t$ (中性)を付加することによって形成される。この既知形が形成される時点は、いずれにせよ、未知形中の母音及び子音の音長、及びSが指定された後のことであるが、その際、「既知形Sそう入規則」といったような規則によって、もし §2.1.に示した音韻的S条件を満たすなら、既知形の強強勢音節にSが起る。既知形形成の際に適用される形態音韻的規則及びそれに附随するSそう入規則は次のようになる (cf. Basbøll [2] II, 15ff.):

(A) 短母音+(単一の) /d, g, v/ に終る形、即ち、未知形では音韻的S条件を満たさせない形は、既知形形成の際に母音または子音を「重音化」する(従って、Sは母音か子音に起ることになる):

(子音重音化):

tov—*tovet* [tɒv]—[tɒvʔəd] (/tɒv/—/tɒvv-əd/),

bud—*buddet* [buð]—[buðʔəd] <命令> (/bud/—/budd-əd/)

(語尾 /əd/[əd] は [ð] の直後に現れるときは [əd] となる,

cf. Andersen [1] 346),

skrog—*skroget* [sgʁɔɾ]—[sgʁɔɾʔəd]

(/sgʁɔɾ/—/sgʁɔgg-əd/);

(母音重(または長)音化):

lov—*loven* [lɒv]—[lɒ•ʔvən] (/lɒv/—/lɒvv-ən/ または

/lɒ:v-ən/),

bud—*budet* [buð]—[bu•ʔðəd] <メッセンジャー> ,

rug—*rugen* [ʁuɾ]—[ʁu•ʔɾən] (*rug* は [ʁu•ʔɾ] もあるが、その場合は(C)のタイプとなる)。

(どのような場合に子音が、どのような場合に母音が重音化されるかを予測することはまず無理であろう。従って、これについてはレクシコンで有標化しておくよりほか仕方がなからう。)

(B) その他の、短母音+単一子音に終る形では子音を重音化する。従って、当該子音が有声ならば、重音化されることによってS条件を満足させることになり、Sをとる。当該子音が無声ならばSは勿論起らない:

(有声子音):

M-M'et [ɛm]—[ɛmʔəð] (/ɛm/-/ɛmm-əd/),

søn-sønne [sœn]—[sœnʔən],

tal-tallet [tal]—[talʔəð],

bær-bærret [bæɹ]—[bæɹʔəð];

(無声子音):

hat-hatten [had]—[hadən] (/hat/-/hatt-ən/),

græs-græsset [gräs]—[gräsəð].

(C) 未知形ですでに長母音または複子音をもつ形では母音または子音の「長音化」は起らず、未知形のSはそのまま既知形でも保たれる:

(長母音をもつもの):

ko-koen [ko•ʔ]—[ko•ʔən],

sprog-sproget [sbɔɔ•ʔɾ]—[sbɔɔ•ʔɾəð];

(短母音+複子音を含むもの):

amt-amtet [amʔd]—[amʔdəð],

mand-manden [manʔ]—[manʔən],

løn-lønne [lœnʔ]—[lœnʔən] (/lœnn/-/lœnn-ən/ の /ø/は /ɣ/ か?).

註(12)で述べた3語も単数既知形ではSをとる: *gulvet* [gɔlʔəð/go-], *sølvet* [sɔlʔəð], *guldet* [gulʔəð]. 前2者は、母音も子音も重音化されないので上述(C)のタイプ, *guld* は /gul/ なら(B)のタイプ, /guld/ なら(C)のタイプとなる。(この他, *nu-nuet* [nu]—[nú•ʔəð], *vindue-vinduet* [véndù]—[véndù•ʔəð], *buffet-buffeten* [byfé]—[byfé•ʔən], *balkon-balkonen* [balkɔŋ]—[balkɔŋʔən] (= /balkoŋŋ-ən/) などはい

ずれも母音または子音の重音化によって既知形に S が起るが、これらのサブグループについては省略する。弱強勢の代名詞 *jeg*, *han*, *hun* [ja_i, han, hun] 等は, *et jeg* [ed ja_i] のように名詞化され、従って、強強勢をもつことになっても S はとらないが、もし *jeg'et* のような既知形があれば、(B) のタイプとなろう。)

上述のことから明らかなように、単数既知形を形成する際に、子音の重音化ばかりでなく、母音の重（または長）音化もあるわけであるので、(A)、(B) のタイプの未知形の末尾子音を基底で重子音とするのは、この点からも不適当と言えよう。

3. 以上述べてきたようなわけで、デ語の母音音長は、それを“重・単”の対立とするにせよ、“長・短”の対立とするにせよ、基底で指定しておくべきであると考ええる。一方、子音は、例えば、§2.2. (iii) (20)/mand/, (iv) (26)/hall/ の末尾第 2 子音 /d/, /l/ のように、たとえ表層の実現形としては現れなくても、/nd/ のような子音結合とか /ll/ のような重子音を基底で認める必要があろう。なぜなら、このように母音及び子音の「音長」を設定すると、少なくとも単形態単音節形における音韻的及び音声的 stød は（ごく少数の例外を除き）完全に予測できることになる。換言すれば、末尾子音の数から先行母音の音長の予測、及び、母音または子音に起る stød の予測の両方を行うことはできないということになる。

通時的には (cf. Hansen [14], [15]), 本来語に関する限り、末尾単一子音は、先行母音の音長には関係なく、無声化されて実現される傾向にあったため、それが‘本来’有声であろうと無声であろうと stød をとらなかつたのであり、stød をとる末尾子音は‘本来’重（または長）子音か子音連結中の第 1 有声子音であった、という風に Hansen ([15] 27) は説明している。それらの複子音は表層でも複子音として発音されていたのであろうが、表層で第 2 子音を発音しなくなった結果、例えば *tal* [tal], *hal* [halʔ], *Hald* [halʔ] などの中、前 2 者は正書法の上での区別を失い、“正音学的”には S を予測するのが困難になったわけである。それ故、上

述の‘本来’を本論の対象となった現代語の場合には‘基底で’と翻訳すれば、*hal* 及び *Hald* の基底形を /hall/ 及び /hald/ とすることは、本来語に関する限り、当然ながら通時的事実と一致しよう。

本論では *støð* について多く述べたが、これがデ語 *støð* についての全てではない。多形態単音節形、多形態多音節形の *støð* は単形態単音節形における S 規則を基礎とするが、後者の場合とは異なる規則を多々設けなくてはならない。単形態多音節形（本来語なら 2 音節形）は原則として *støð* をとらないので、多音節形に起る *støð* は原則として多形態語に起るということになる。従って、例えば § 2.3.4. に示したように、多形態語の *støð* は各品詞の原形または語幹の音素とか *støð* 等が決定された後の、屈折、派生、複合等の形態音韻のプロセスにおいて扱われるべきものである。

（共時的）単形態多音節語の場合（例：*have* (sb.) [hæ:və], *ende* (sb.) [ɛnə], *kasse* (sb.) [kasə], *maske* (sb.) [masgə], *nota* [no:da], *node* [no:ðə]），次のような条件をつければ、後続子音（NB. 語末子音ではない）から先行母音の音長を予測することは単音節の場合よりずっと容易であろうと思われる。その条件とは次のようなものとなろう：（1）語一的強強勢をもつ音節（原則として 1 語につき 1 個）に現れる場合を除き、母音は全て短母音である；（2）語一的強強勢をもつ音節に現れる母音は後続子音が複数なら短い。（母音間子音は次のように音節分けされよう（cf. Basbøll [4], [5], [7], [8]）：（i）母音間単一子音は後続母音が /ə/ 以外であれば後続音節頭子音となる；（ii）母音間子音連結は語頭及び語末で可能な連結に分ける（しかし、これだけの規準では多義的な連結は起り得る）；（iii）母音間子音連結は後続の母音が /ə/ でない限り、そして（ii）に反しない限り、できるだけ多くが後続音節頭の子音となる。）

このようにみていくと、正音学的見地は別として、音韻論（あるいは文法の音韻部門）において、後続子音の数から先行母音の音長を予測することを妨害するのは、まさに（単形態）単音節形及びそこに起る *støð* とい

うことになろう。しかし、この単音節形というタイプの語が本来デ語というよりはゲルマン語における一般的特徴であることは言うまでもない。

(7.1976)

註

(1): 本論でいう音素 (///に入れて示す) は生成音韻論でいう基底セグメント (セグメントは素性の集合と言えようが) から最終の実現形に至るまでのある時点まで——狭義の音素論的音素の時点辺りまで——の音韻規則に対して入力となるセグメントのことを言う。これに平行し、「音韻的」というのは、広義、狭義の「(形態) 音素的」の意に用いる。これに対し、「音声的」というのは主として「最終の実現形の」という意味で用いるが、時に生成音韻論で言う「‘near-surface,’ ‘shallow’ の時点の」の意にも用いる。しかし、「音韻規則」とは音韻論あるいは音韻部門における規則を全て含むものとする。

(2): このような“重”母音は Hjelmslev ([18]) にみられる。彼の場合、彼の言う taxemes (=概略, 形態音素) の数を減ずることを目標にするため、例えば /v/, /j/ のような子音を認めず、各々 /u/, /i/ とし、音節中での位置によって /u/ が [v, ʉ, u] のいずれかに、/i/ が [j, i, i] のいずれかになることが予測できると考える。しかし Basbøll ([2] 178 ff.) が批判する通り、Hjelmslev のいう /ii/, /ui/, /uu/, /iu/ の種々の実現形は音韻環境から自動的に決められない。

因みに、“長”母音の実現形は、例えば英語とかスウェーデン語におけるような二重母音化発音はない。二重母音発音形は“短”母音または短母音状音化された長母音 + 子音から派生すると考えるのが適当と思われる (cf. Hjelmslev [18]; Basbøll [6] その他; Rischel [22]; cf. § 2.3.3. (f), (g))。

(3): 以下の S に関する説明は Hansen ([15] 特に 27 及び 35—39), Hjelmslev ([18]), Basbøll ([2], [5], [9]) に基く。Hansen は ‘stød 基’ (‘stødbasis’) という単位を設定し、それをもつものともたないものに分けるが、音韻的、音声的 S 基の区別は明瞭ではない。というより、Hansen は (歴史的) 綴りと発音の関係、つまり ‘正音学的’ (orthoepic) 関係を論じている。Hjelmslev は音声形としては必ずしも

実現されるとは限らない‘潜在’子音を認めることによって音韻的S生起の条件を明確にしたが、各音素の素性 (features) についてはほとんど何も述べていない (彼は‘実質’には関心をもたない)。これらの先達のSに関する説明を精練したのが Basbøll で、彼は主として生成音韻論の見地から、‘S基’、‘S生起条件’をセグメント (= 音素及び異音) の素性を有効に用いて説明している。このようなわけで、以下の説明は主として Basbøll の記述に基くが、本論で示すセグメントの数とか素性は必ずしも全てが Basbøll の示すものというわけではない。

(4): stødは音節頭子音には一切現れない。[b, d, g] は母音間では無声または半有聲で無気 ([-aspiration]) 音、その他の位置では無声無気音。[p, t, k] は無声有気 ([+aspir]) 音 (cf. 拙論 [25])。[ð, ɾ, ʋ, i, u] は無まさつ継続音 (cf. Andersen [1] 344 ff.)。従って、‘音声的S基’をもつ音は [+voice, +sonorant, -aspiration] などの素性をもつ。しかし、子音の実現形の素性をどのように設定するかは未解決の問題で、本論に示すものは仮のものである。例えば、[v, j] と [u, i] をどのように区別するか。前者はまさつ性の弱いまさつ音、後者はまさつ性のない継続音 (frictionless continuants) である。

ところで、stød は音声的に有聲の音にしか起らないが、その理由は音声的には次のように説明されよう。調音生理的に言って、声帯が有聲音を形成するのに最低限必要とされる程度に規則的に振動している時に (音響的にデ語では [+sonorant] になっている時に)、その規則的振動を不規則にすることによって stød は形成されるので音声的に有聲の音にしか起らない (cf. Smith [23], Petersen [19])。尚、長・短母音状音の音声的音長の相異に関しては、短母音状音は長母音状音の50~60%の音長をもち、Sを伴う母音状音は (Sの部分を除いて) 長母音状音の80~85%の音長をもち、その質も同じであるとみなされる (cf. Fischer-Jørgensen [13])。それ故、母音に関しては、長母音音素の実現形である長母音状音にSが起ると考えるわけである。

(5): 単音節形実質語の音節末に現れる [ŋ] には必ずSが起る (sang [saŋʔ], lyng [lɔŋʔ], eng [eŋʔ], lang [laŋʔ], ung [ʊŋʔ/oŋʔ], etc.)。[ŋ] が /ng/ から派生すると考える根拠のもっとも強力なものの一つとして、Basbøll ([3]) はこの音韻的S条件を挙げる。即ち、/ng/ の /n/ は同条件を満たす: /ng/ → (Sそう入) /nʔg/ → (調音点同化) [ŋʔɣ], そして同時またはその後で [ɣ] が脱落し [ŋʔ] となり、[ŋ] は有聲子音状音なので、そこにSが起る。しかし、フランス語よりの借入語及び擬音語の単

音節形末尾に現れる [ɐ] には S は起らない。それ故、この場合には /ɐ/ を認めるべきかもしれないと Basbøll は述べている (cf. § 2.3.4 の終り)。

(6): 本来語の語いでは、(屈折、派生等の変化を経ていない) 単形態形は 1 または 2 音節形である。前者は S があること、後者は S がいないことによって特徴づけられると言われる (cf. Hansen [15] 25; Ringgaard [20] 21 f.)。一方、スウェーデン語、ノルウェー語などでは、Accent 1 と呼ばれる韻律単位が 1 音節形の全て (及び 2 音節形の一部) に起り、その他の場合には Acc. 2 が起る。そこで、この Acc. 1 とデ語の S が対応するとか、同種の機能をもつとか言われるところとなる。しかし、上述のように、S は 1 音節語の全てどころか 1 音節実質語の全てに起るわけではない。従って、S と Acc. 1 の歴史的関連性は別として、Basbøll ([9]) が指摘する通り、S が ‘有標’ (marked) であるのに対し、Acc. 1 は ‘無標’ (unmarked) である。

(7): ‘保守的’ 標準口語とはコペンハーゲンを中心とする地域で用いられる話しことばの中、年輩の人々によって用いられるものである。これは拙論 ([27]) で “RM 1” と称したもので、この RM 1 に対して “RM 3” と称する話しことばは同地域の比較的若い世代で用いられるものである (cf. Brink/Lund の大著 ([10])). 音韻面で、RM 1 も RM 3 もほぼ同一の基底音素をもつが、RM 3 には RM 1 にはない比較的遅い時点で適用される付加的規則がある。その結果、両者の最終的実現形が互いに異なる場合がある (cf. 巻末「付表 I」)。

本論で RM 1 を選ぶ理由は、RM 3 にのみ適用される規則の記述を加えると論議が必要以上に複雑になったり、理解しにくくなったりするからである。

(8): 例えば、*uld* [ulʔ], *bold* (adj.) [bɔlʔ] では [l] に S が起っているので、/l/ の後に子音が続くと思われる。これらの語は (iii) のタイプの語とは異り、潜在子音が /d/ であることを示し得る派生形をもたないので、(iv) のタイプと同様、重子音を設定すべきである、即ち、[ulʔ] ← /ull/, [bɔlʔ] ← /boll/。ところで、筆者の観察によると、綴字 *u* で表わされる母音の質及び量は次のように言えると思われる: *ul* のとき、長母音なら [u:] (/u:/), 短母音なら [ɔ/o] (/o/)。しかし、*ul* の後に、*d*, *t*, *s* という歯(茎)音字が続くときは [u] (/u/): *huld* [hulʔ], *kuld* [kulʔ], *kult* [kulʔd], *sult* [sulʔd], *puls* [pulʔs], etc. 従って、*uld* の方は /uld/ の可能性がない

わけではない（この点については後に再び述べる）。一方、*bold*の方にはそのような綴字と発音の関係は一切ない。以上、まとめてみると、[ulʔ]は /ull/ または /uld/, [bplʔ]は /boll/ となる。ところで、語源的には、*uld*〈ウール〉の *ld*は *ll*のようであり（古ノルド *ull*, cp. 英 *wool*, 独 *wolle*), *bold*〈勇敢な, 男々しい〉は低独語よりの借入語だが同語では *bolt* (cp. 英 *bold*, 独 *bald*〈間もなく〉) で、むしろこちらの方が /boll/ というより /bold/ の可能性がある！しかし、共時的には /ull/, /boll/ のように重子音とするのが適当であろう。ついでながら、*bold* [bplʔd]〈ボール〉は *bolt* [bplʔd]〈ボルト〉と同じ発音であることからわかるように、その綴字とは関係なく /bolt/ であって /bold/ ではない。なぜなら、/d/ だとすれば音節末 /l/ の後では発音されない筈であるし、万一発音されるようなことがあっても [ð] となるはずであるから。従って、*bold* (adj.) の *d* に対応の音素は /l/, *bold* (sb.) のそれは /t/ ということになり、いずれの場合も /d/ ではない。（尚、末尾 *-ld* の *d* を *bold* (sb.) のように発音するのは正音学的には (orthoepically) 例外と言える。逆に、これこそ例外であるが、*guld*, *gulv*, *sþlv* には *S* が起らない。これについては 註(12) で述べる。

(9): これらの派生形における“短音化”は *jord-jordisk* (, *nord-nordisk* [no·ʔɹ] -[noɹdisg], etc.) のそれが比較的遅い時点での変化、即ち、/o:/ → [o:] → [o] のような短母音状音化というプロセスを経るのに対し、*færd-færdes* の方はかなり早い時点での変化、即ち、/ɛ:/ → /ɛ/ → [ä] のような短母音化という変化であると言えよう。このような長・短音化については別の機会に詳しく述べるつもりである。

(10): ‘保守的’標準語の場合、音節末 /r/ ([ɹ]) 及び /d/ ([ð]) の前に現れる長母音は随意的に短母音状音化されて実現することがある (RM 3 ではこの短母音状音化は強制的である)。(38), (39) のような場合には、長・短母音状音の聞き分けというか *S* の生起位置が母音なのか子音 [ɹ] なのかを聞き分けることは、それほど容易ではない (cf. Petersen [19])。長母音が短母音状音化されて実現すると *S* は（もしあれば）後続子音に移行するが、この移行は *S* が一つの分節音素というより音節にかかるという特質をもつためであると Hansen ([15] 29) は言う。この結果、例えば (6) *nþd* [nθ·ʔð]〈苦惱〉が [nθðʔ] のように発音されると、この (6) と (27) *nþd* [nθðʔ]

〈木の実〉はこの形、即ち、未知形では同音異義語となる（単数既知形 (6) *nøden* [nø·?ðən], (27) *nødden* [nøð?ən] については § 2.3.4. 参照）。しかし、(39) *børs* [bøʁs] 対 (41) *børst* [bœʁsd] のように、長・短という音長による音韻的対立がそのまま音声的にも音長の相異によって実現されるというわけではなくても、母音状音の質、Sの有無等によってその音韻的対立が音声的に示される場合もあるわけである。

(11): アルファベットの読み方で、短母音（状音）+子音に終るものは、たとえその子音が有声であってもSをとらない: *J* [jʊð], *L* [el], *M* [em], *N* [en], *R* [äʁ]。一方、母音に終るものは（全て単音節形で）Sをとる: *A* [æ·?], *B* [be·?], etc.

この他、一形態語とは言えないが、動詞命令形 *kom!* [kɔm] はSをとらない（cp. 同過去形 *kom* [kɔm?]）。動詞命令形では、強音節中の長母音状音及び短母音状音後の有声子音状音に必ずSが起るが、例外が2語ある: *kom* 及び *gør!* [gœʁ] (cf. 註(13))。

(12): /l/+子音に終ることによって音韻的S条件を満たすにもかかわらず、Sをとらない語が2または3語ある: 即ち、*gulv* [gɔl/gol], *splv* [sɔl] 及び *guld* [gul]。

Hansen ([15] 36) は、恐らく通時音韻論的及び正音学的見地からと思われるが、これらの3語を例外とする。Basbøll の諸論文では前2者のみを例外とし、*guld* には一切触れていない。/v/ に関しては、*gulv* の複数形 *gulve* [gɔlvə], *splv* から派生の動詞 *forsplve* [fɔsɔlvə] では [v] で実現されている。*Guld* (cp. 英, 独 *gold*) の場合、-d が /d/ であることを示し得る屈折形、派生形等は存在しないので (cf. *gylden* (adj.) [gyl?ən], 英, 独 *golden*)、基底形は /guld/ ではなく /gul/ とすべきであろう。そうすれば、/l/ にSが起らないのは不思議でも例外でもない (cp. Sなしの *tal*, *nul*, *fl*, etc.). Basbøll は *guld* をこのように扱うつもりなのであろう。しかし、註(8)で *uld* に関して述べた正音学的見地からみれば /guld/ の可能性はなくてはならない。いずれにせよ、*uld* とは異り、*guld* はSをとらないので /gull/ の可能性はないことになる。尚、これら3語の単数既知形におけるSについては、§ 2.3.4. をみよ。

(13): 命令形 *gør!* [gœʁ] はSをとらない (cf. 註(11))。この他、やはり単形態語ではないが（従って、現在論議中の原形または語幹に関する規則を適用した後でのプロセスとなるが）、*var* [vɑʁ] (*være* の過去形)、*er* [äʁ], *gør* [gœʁ], *tør* [tœʁ] (各々 *være*, *gøre*, *turde* の現在形) は語根的強強勢をもつがSをとらない。この他の単音節不規則過去形 (/r/ で終らなくても良い)、及び現在形は多音節形で、S

条件を満たせば、各々「過去形」及び「現在形 S そう入規則」によって強音節中の母音か子音に S が起る。

付表 I RM1 及び RM3 における長・短母音の分布

(本表は、前号 Idun II, 1974, p. 5 に示した「表 2」の誤りの訂正も兼ねる。)

RM 1

長母音の実現形

X_X	X_N	R_X	X_R	R_N
i:	i:	i:	i:	i:
e:	e:	e:	e:	e:
ɛ:	ɛ:	ɛ:/æ: ²	ɛ:	ɛ:~ɛ_T:
æ:	æ:			
		ɑ:	ɑ:	ɑ:

短母音の実現形

X_X	X_N	R_X	X_R	R_N
i	(i) ¹	i	i	(i) ¹
e	e	e~e_T		e
ɛ	ɛ			
		ä ²	ä	ä
a/ɑ/a ³	a/ɑ/a ³			
		ɑ	ɑ	ɑ

y:	y:	y:	y:	y:
ø:		ø:	ø:	(ø:) ⁴
	œ:	œ:	œ:	œ:

/y(:)/
/ø(:)/
/œ(:)/ ⁵

y	(y) ¹	y	y	
ø	ø	(ø) ⁵		ø
	œ	œ ⁵		œ _(T)
			œ	

u:	u:	u:	u:	u:
o:	o:	o:	o:	o:
ɔ:	ɔ:	ɔ:		ɔ:
			ɒ:	

/u(:)/
/o(:)/
/ɔ(:)/

u	u	u	u	u
(o) ⁶				
ɔ	ɔ	ɔ		ɔ
ɸ ⁷	ɸ	ɸ		ɸ
			ɒ	

R=/r/, -R=音節末/r/, しかし、/a(:)/, /ɔ(:)/ の場合は次音節頭 /r/ も関与的。

N=nasal cons.; X=R, N以外; (音声記号間の)/=「または」。

1. 外来語においてのみ。
2. Ege 1965 によれば [æ:] は R-[ð] に, [ɛ:] はその他の環境; [ä] は [æ] と [a] の中間。
3. [a] = X-zero または [dent/alv], [α] = X-[lab], [a] = その他の環境。
[α] = [a] と [a] の中間, しかし [α] の代わりに [a] を用いる個人もいる。
4. [ø:] はこの環境に現れない筈。([n] の前には絶対現れない (Basbøll, [2] p. 192))。
5. /œ/ は一部の個人に現れる。即ち, [ø] と [œ] の両者をもつ個人に。
6. [o] は外来語においてのみ現れ, その場合, 全ての環境に現れ得る。
7. [ɔ] = [ɔ] と [ɔ] の中間, 円唇性は強くない。

RM 3

長母音の実現形

X_X	X_N	R_X	X_R	R_N
i:	i:	i:	i:	i:
e:	e:		e	e:
ɛ:	ɛ:	ɛ_T: ~	ɛ(T) ~ æ	ɛ: ~ æ
æ:	æ:	æ:	(T)	(T)
		a:	a:³	a:

y:	y:	y:	y	y:
ø:			ø	
	œ:	œ_T ~		
		œ(T)	œ(T)	œ:

u:	u:	u:	u	u:
o:	o:	o:	o	o:
ɔ:	ɔ:	ɔ(T):		ɔ(T):
			ɔ:³	

音 素
/i(:)/
/e(:)/
/ɛ(:)/
/a(:)/

/y(:)/
/ø(:)/
/œ(:)/⁶

/u(:)/
/o(:)/
/ɔ(:)/

短母音の実現形

X_X	X_N	R_X	X_R	R_N
i	(i)¹	i	i	(i)¹
e	e			
ɛ	ɛ			
		æ		æ
		ä²	ä	ä
a/a⁴	a/a⁴			
		a	a(:)³.⁵	a

y	(y)¹	y	y	
ø	ø			
	œ	œ		œ
			œ(T)	œ_T

u	u	u	u	(u)?
(o)¹				
ɔ	ɔ	ɔ		ɔ
Λ⁷	Λ	Λ		Λ
			ɔ(:)³.⁵	

1. 外来語にのみ，しかし，その場合，[o] は全ての環境に現れ得る。
2. [ä]=[æ]と[a]の中間。
3. 音節末 /r/ と融合した形。
4. [a] = X-zero または [dent/alv]; [ɑ]=その他の環境。
5. [ɑ]=強強勢をもつ語末音節（/r/ と融合）または次音節頭/r/ の前; [ɑ:] その他の環境（/r/ と融合）[ɒ] = 強強勢をもつ語末音節（/r/ と融合）または次音節頭 /r/ の前; [ɒ] その他の環境（/r/ と融合）
6. /æ/ は分析の仕方によって設定されることがある。
7. 僅かな円唇性がある。

参 考 文 献

- [1] Andersen, Poul: *Dansk Fonetik*, Copenhagen, 1954 (³1964).
- [2] Basbøll, Hans: "A Commentary on Hjelmslev's Outline of the Danish Expression System" (I & II), *Acta Ling. Hafn.* Vol. XIII, No. 2, 1971, 137—211, & Vol. XIV, No. 1, 1972, 1—24.
- [3] —//—: *Konsonanter (I & II) (i dansk rigsmål, fonologisk set)*, Copenhagen, 1973 & 1974, 87 pp. (mimeographed).
- [4] —//—: "Notes on Danish Consonant Combinations," *Annual Report of the Institute of Phonetics, Univ. of Copenhagen (=ARIPUC)* Vol. 7, 1973, 103—142.
- [5] —//—: "Notes on the Phonology of Danish Imperatives with a Digression on Vowel Quantity," *ARIPUC* Vol. 4, 1970, 15—42.
- [6] —//—: "The Phoneme System of Advanced Standard Copenhagen," *ARIPUC* Vol. 3, 1969, 33—54.
- [7] —//—: "The Phonological Syllable with Special Reference to Danish," *ARIPUC* Vol. 8, 1974, 39—128.
- [8] —//—: "Some Conditioning Phonological Factors for the Pronunciation of Short Vowels in Danish with Special Reference to Syllabification," *ARIPUC* Vol. 6, 1972, 185—210.
- [9] —//—: "Some Remarks concerning the Stød in a Generative Grammar of Danish," *KVAL* No. 729, 1972, 5—30.
- [10] Brink, Lars & Jørn Lund: *Dansk Rigsmål* (2 vols.), Copenhagen, 1975.
- [11] Ege, Niels: "The Danish Vowel System," *Gengo-kenkyu* No. 47, 1965, 21—35.
- [12] Elert, Claes-Christian: *Phonological Studies of Quantity in Swedish*, Uppsala, 1965.
- [13] Fischer-Jørgensen, Eli: "Om vokallængde i dansk rigsmål," *N. t. t. s.* 1955, 33—56.

- [14] Hansen, Aage: *Den Lydlige Udvikling i Dansk, 2, Konsonantismen*, Copenhagen, 1971.
- [15] —“—: *Stødet i Dansk*, Copenhagen, 1943.
- [16] Haugen, Einar (ed.): *Norwegian-English Dictionary*, Oslo, 1965.
- [17] Haugen, Einar: “On the Rules of Norwegian Tonality,” (1967), *Studies by Einar Haugen*, The Hague, 1972, 531—49.
- [18] Hjelmslev, Louis: “Grundtræk af det danske udtrykssystem med særligt henblik på stødet,” *Selsk. f. nord. fil. årsberetning for 1948—50*, 1951, 12—24.
- [19] Petersen, Pia Riber: “An Instrumental Investigation of the Danish “stød”,” *ARIPUC* Vol. 7, 1973, 195—234.
- [20] Ringgaard, K.: *Danske Dialekter*, Aarhus, 1971.
- [21] Rischel, Jørgen: “Consonant Gradation: A Problem in Danish Phonology and Morphology,” *Proc. Int. Conf. Nordic and Gen. Ling. 1969*, 1970, 460—80.
- [22] —“—: Notes on the Danish Vowel Pattern,” *ARIPUC* Vol. 3, 1969, 177—206.
- [23] Smith, Svend: *Bidrag til Løsning af Problemer vedr. Stødet i dansk Rigssprog*, Copenhagen, 1944.
- [24] Weinstock, John M.: “A Sketch of Norwegian Phonology,” *Proc. Int. Conf. Nordic and Gen. Ling. 1969*, 1970, 572—98.
- [25] 間瀬英夫:「デンマーク語の閉鎖音」, *Idun* I, 1973, 3—23.
- [26] 間瀬英夫:「デンマーク語の /r/」, 大阪外大「学報」第30号, 1974, 61—71.
- [27] 間瀬英夫:「デンマーク語の母音」, *Idun* II, 1974, 3—36.